

## 英文の読み方を考えるⅨ

—法とモダリティーの理解に向けて①—

平井 正朗

大学入試、特に国公立大学の二次試験における読解総合問題では、正確な文構造解析に基づき、文やパラグラフの結束性(cohesion)を把握する「読解力」を測定すると同時に、背景知識を活用して主題にアプローチする論理的思考力(logical thinking process)が要求される。設問形式も下線部和訳、指示語説明、要約、内容一致、空所補充など、ヴァリエーションに富んだものになっている。仮定法のジャンルでは、法の識別が合否のキャストイング・ポートになることは言うまでもなく、本稿ではそこにスポットを当てる。

(01) When Mum caught us doing something wrong — smoking, skipping class — her best weapon was always, “If I catch you again, I’ll tell your father.” She never caught us again. *And if we ever did end up getting a good scolding from him, we turned to her for comfort.* “Does Dad really love me?” I’d ask.

(名古屋大)

(私たちが何か悪いこと—たばこを吸ったり、授業をさぼったり—しているのを見つけると、母の最高の武器はいつも「もう一度見つけたら、お父さんに言うわよ」だった。彼女は二度と私たちを捕まえなかった。そして、父にたっぷり叱られるはめになったとき、私たちは母に慰めを求めた。「お父さんは本当に私を愛しているの」と尋ねたものだった。)

初歩的なレベルでは、if+SVXを見れば、仮定法=却下条件を長期記憶に保存してしまい、直説法を見落としがちである。(01)では、太字部分の主節に仮定法のマーカーとなる過去形の助動詞 would, could, might, shouldがないことから直説法、すなわち、開放条件とわかる。ただし、次のように過去形の助動詞を含む直説法の場合もあるので、談話情報の基準となる時制に注意しなければならない。

(02) The minister was unhappy, but Henry understood. *He was marrying a woman who wouldn’t do things that didn’t make sense, even if everyone else did them.* (東北大)  
(牧師は不愉快だったが、ヘンリーはわかっていた。たとえ、ほかのだれもがそうしたとしても、道理に合わないことは絶対にしない女性と結婚しようとしていた。)

(02)は助動詞 wouldn’tがあるが、第1文の談話情報の基準となる時制が過去であるから、第2文は直説法過去とわかる。ここでの wouldn’tは、〈拒絶〉を表し、時制の一致の影響を受けている。

(03) *If the advent of photography was one major turning point in the framing of modern conceptions of ‘the real’, we may now be on the verge of another, equally significant turning point:* with the twentieth century receding quickly behind us, we are gradually shifting from the analogue world of roll film that dominated the last hundred years to a brave new digital world where the image is coded on computer chips — whether in still cameras or in the video camera. (大阪外大)  
(写真の出現が「現実」についての近代的な概念の枠組みの一つの大きな分岐点であったとすれば、我々は、現在、それと同じように重要な分岐点の間際にいるかもしれない。20世紀があつという間に遠のくにつれて、この100年間で優位を占めてきた巻きフィルムに代表されるアナログ世界から、まだカメラであってもビデオカメラであっても、画像がコンピューター・チップの上で記号化される、すばらしい新デジタル世界へしだいに移行しつつある。)

直説法で描写されている(03)では、if節が過去時制であるのに対し、主節が現在時制になっている。読解過程では現在と過去の〈対比〉という視点から「新デジタル世界」に焦点を当てた読み方を促したい。また、欧米の論理展開の機軸となる〈二項対立〉概念の把握が、パラグラフ「内」からパラグラフ「間」の結束性把握へ発展できることも示唆しておきたい。

(04) *If I asked how you picture life, what image would come to your mind? That image is your life metaphor. It's the view of life that you hold, consciously or unconsciously, in your mind. It's your description of how life works and what you expect from it.*

(県立広島大)

(人生をどのように絵で表すかと私が尋ねたら、あなたはどのようなイメージが心に浮かぶだろうか。そのイメージはあなたの人生を象徴するものである。意識的であれ、無意識的であれ、それは心に描いている人生の視点である。それは、人生がどのように動いているのか、そしてそこから何を期待しているのかについて、あなたが描いているものなのである。)

(04)では、第2文 *That image is* ～から談話情報の基準となる時制が現在であり、助動詞 *would* から第1文が仮定法過去だと判断できるが、パラグラフ冒頭に *If+S+過去形*～という形があると直説法と混同する傾向が見られる。仮定法過去の場合、話者や書き手が、現在の事実と反する仮定を表す〈非現実的〉トピックに加えて、現在、もしくは未来において実現可能性が低いと考えるトピックも〈記号化〉するため、談話の表層構造のみならず、〈対立〉的深層構造を読み取らなければ誤訳が生じる。

(05) *In some cultures, the use of a particular name is an offence. In imperial China, for instance, it was a crime to use the name of a reigning emperor. This could provide problems when the emperor's name was also a common word. If this occurred in an English-speaking country today where the*

*emperor's name was Bill, it would be illegal to talk about a bill from the electricity company, a bill before parliament, or the bill of a bird.* (熊本県大)

(いくつかの文化では、ある特定の名前を使用することが違法行為である。たとえば、中国王朝では、君臨する皇帝の名前を使うことが犯罪であった。これは、皇帝の名前が一般的な単語でもあるとき、問題となった。もしビルという名前の皇帝がいる今日の英語圏の国でこのようなことが起これば、電力会社からのビル(請求書)や、議会に提出されたビル(法案)、あるいは鳥のビル(くちばし)について話すことは違法になるだろう。)

(05)は *today* から談話情報が現在を基点としており、太字部分が仮定法過去であることを読み取らなければならないが、時制の一致によって *where the emperor's name was Bill* となっていることから直説法と混同しやすい。

(06) *If you were planning a road trip across the country, would you leave without having a map? Or would you look at the map once and then forget about it? If that was your method, you would never arrive at your destination. But if you were absolutely determined to arrive at your destination in the shortest time possible, you would study the map carefully, charting out your route for each day. And if you made a wrong turn along the way, you would pull over, look at your map, and get back on track.*

(お茶の水女子大)

(もし、あなたが車で国内を横断する旅行を計画しているならば、地図を持たないで出発するだろうか。あるいは一度だけ地図を見て、その後忘れてしまうようなことがあるか。もしそれがあなたのやり方なら、目的地には決して到着しないだろう。しかし、最も短い時間で目的地に到着しようと強く決意したら、入念に地図を調べ、一日ごとの道順の計画をたてるだろう。そして途中、間違った方向に行っていたら、道路脇に車を止め、地図を見て、引き返すだろう。)

仮定法は実現可能性の低いトピックから可能性ゼロのトピックまで話者や書き手のモダリティー(modality)によって、豊かなヴァリエーションを形成するが、(06)のように、全文が仮定法過去の場合、談話の主情報へ誘導するための〈たとえ〉と考え、仮定法表層構造における〈非現実〉と深層構造における〈現実〉を読み違えないようにしなければならない。

(07) *Until the 1960s, if you were a woman who wanted to play in a major orchestra, your best chance was to take up the harp.*

That seemed to be about the only instrument women were allowed to play in the top philharmonics in the first half of the last century.

(都留文科大)

(1960年代まで、もしあなたが大きなオーケストラで演奏を望む女性であったなら、最大のチャンスはハープを始めることであった。それは、前世紀の前半、女性がトップクラスの交響楽団で演奏が許可された唯一の楽器のようであった。)

形態上、直説法であっても言語外情報によっては却下条件として解釈できることもある。(07)では、語り手は、現在の視点から「1960年代」という過去の視点へ談話情報を移動させている。基準時間は過去であるから、読み手となる you が女性であれば、〈開放条件〉というとらえ方でよいが、読み手が男性であれば、... if you had been a woman who wanted to play ..., your best chance would have been to take up the harp. とすべきところである。ここでは破格文とするのではなく、言語外情報から「破格を超えた読み」を実践したいものである。

(08) If he says "We must meet again soon" before leaving, you will know *he would rather go over Niagara Falls in a barrel* than do so. Learn the lesson now: the English speak in code.

(京都府大)

(もし去り際に、「きっとまた会えますよね」と言う場合、その人はそうするくらいなら、たるに入ってナイアガラの滝から落ちるほうがましだと思っているのがわかるでしょう。さあ、イギリス人は暗号で話すという教訓を学びなさい。)

(08)では、主節の他動詞 know の目的語で、名詞節を導く従属接続詞 that が任意削除されている。その節内部に仮定法過去を組み込み、読み手・聞き手を〈非現実〉世界へ誘導するだけでなく、〈比喩〉を駆使することによって主情報のトピックを一層浮き彫りにし、文体的効果を出している。ここでは、「もう二度と会いたくないが、会うようなことがあれば、たるに入ってナイアガラの滝から落ちたほうがましだ」という context を読み取りたい。would rather A than B は慣用語法化しがちであるが、would を用いることによって、叙述内容を「直裁的」に述べることで回避され、婉曲的表現になっているという仮定法の本義を提示することができれば評論文や論説文の精読には有益である。

(09) A couple of days after Nepal's crown prince gunned down several members of the royal family — including his parents — in a drunken rage before shooting himself, an American friend phoned me at my California home. "Isn't that a shame," she exclaimed. "*It never would have happened if the king and queen hadn't been pushing that poor guy towards an arranged marriage.* What a barbaric custom!"

(名古屋大)

(ネパールの皇太子が酔って激怒したあげく、自分の両親を含む王族数名を射殺し、銃で自殺した2~3日後に、あるアメリカ人の友人がカリフォルニアの自宅に電話してきた。「恥ずかしい話じゃない」と彼女は叫んだ。「王様や王妃があのかわいそうな男に見合い結婚を押しつけなかったらこんなことは起こらなかったのに。なんて野蛮な習慣なのでしょう!」)

(09)は仮定法過去完了で描写されている。仮定法過去完了が、過去の事実と反する仮定であるから「王様や王妃があのかわいそうな男に見合い結婚を押しつけたから、こんなことが起こった」という深層談話情報を読み取れなければ誤読につながる。ここでは、本来、would never have + p.p. となるところが任意倒置されて never が左方移動したこと、if 節が後置されていること、さらに従属接続詞 if の前に comma がないことが誤読の要因となっている。

(10) They would have been married sooner **had it not been for David's insistence on finding a career job before settling down.**

(千葉大)

(もしデービットが身を固める前に生涯の仕事を見つけると言い張らなかつたら、彼らはもっと早く結婚していただろう。)

(10) は if it had not been for David's insistence ... の従属接続詞 if の任意削除に伴う強制倒置の言語現象であるが、if の削除に伴い、強制倒置が行われていること、さらに had の前に comma がいないことから文構造がとらえにくくなっている。ここでは、助動詞の過去形 would, could, might, should を伴う主節の後に、comma のない were, had, should, could で始まる疑問文の形が後続した場合、仮定法を疑うという reading skills を提示しておく。

(11) Finally, if a particular species is found in a community, it obviously has some role in the community. **Should that species be eliminated**, whatever the role of that species had been, it is no longer precisely filled, although various competitors can and do take over parts of the role.

(お茶の水女子大)

(最後に、ある特定の種がある群で発見されても、それはその群で明らかに何らかの役割をもっている。たとえもし、その種が消滅してしまっても、さまざまな競争相手はその役割の一部を引き継ぐことになるが、その種の役割が何であったとしても、もはや二度と正確にはそれが果たされることはない。)

should = 「～すべき、～はず」のイメージが強すぎて、仮定法を見抜けないケースが多い。eye span の移動とともに、If that species should be eliminated との同義性をイメージしたいものである。If+S+should+動詞の原形～は、談話情報におけるトピックの実現可能性が五分五分という前提で、話者、もしくは書き手が「その実現可能性について低い」と思考する場合に生成される統語環境であり、実現可能性ゼロの場合には生成されない。

(11) のように「たとえもし～であっても」という

〈譲歩〉の意味で解釈できることもある。なお、この形態は、if 節に〈不確実〉を示す should が組み込まれたものであり、開放条件の場合もあるため、主節には will や命令形なども用いられる。英作では注意したい。

(12) Of course, **if the entire nation were to be wiped out, the individuals and their families would die, but the disappearance of the nation as a social unit would not in itself pose a threat to individual or family survival; only if it were to be accompanied by ethnic violence or severe economic collapse would it be life-threatening, and such disastrous events are not an inevitable consequence of the loss of political independence.** Conversely, there is no logical connection between the gaining of political independence by a subject nation and increased life chances for its citizens.

(一橋大)

(もちろん、国家全体が消し去られてしまうのなら、個人や家族も死んでしまうだろうが、社会集団としての国家の消滅は、それ自体では個人や家族の生存にとって脅威とはならないであろう。民族的暴力や厳しい経済的崩壊が伴っている場合だけは、生命が脅かされることになるだろうが、そうした破壊的な出来事は、必ずしも政治的独立を失うことの避けられない結果ではない。逆に、従属する国家の政治的独立と、その国民の生存の可能性の増加の間には論理的な関係はない。)

(13) All that is happening in the outside world and in the life of men must arouse our interest. **If we as teachers were to shut ourselves off from anything that might interest human beings, it would be a deplorable thing.**

(信州大)

(外の世界や人間生活の中で起こっていることはすべて、我々の興味をひくものであるにちがいない。我々が教師として、人類に興味を与えるような事柄から自らを閉ざしてしまうようなことがあれば、それは嘆かわしいことである。)

If+S+were to+動詞の原形～は、仮定法過去の一種であり、話者・書き手が、現在、もしくは未来における実現可能性ゼロのトピックから、やや可能性のあるトピックまでかなり広い範囲で産出される。そのため、談話情報における実現可能性を考慮して読解を進める必要がある。〈予定・義務・命令・運命・可能・意図〉を表す be 動詞+to+動詞の原形～と連動させて学習すると効果的である。なお、口語では、If you were to call him for me, I would be very grateful. (私の代わりに彼に電話してもらえると、とてもありがたいのですが)というように〈控えめな提案〉を表すこともある。モダリティーを配慮した解説も加味すると verbal communication に直結する。

(14) The girls were also asked which of the role-models they could remember. There were spectacular examples of role-models' jobs being translated or computed into ones that women were more likely to do: *It was as if the girls did not believe the evidence of their own eyes.* (名古屋市大)

(少女たちは、どの役割モデルを思い出せるかも尋ねられた。役割モデルの職種が、より女性が就きそうなものに変えられたり、算定されるといった、目を見張らせるような例があった。それはあたかも少女たちが自分の目で確かめたものを信じていないかのようであった。)

as if, as though に後続する節の情報は、〈比喩〉であり、〈たとえ〉にすぎない。話者・書き手が〈非現実的〉トピックを描写したい場合は仮定法、〈事実〉に基づく可能性が潜在するトピックを描写したい場合は直説法となる。(14)は仮定法過去で表現されている。It was as (it would be) if the girls did not believe ～から産出されたものと考えるとわかりやすい。

(15) Some even see such a prospect as a reason to be suspicious of science as a negative effect upon human belief in certainty, *as though the construction of the physical Universe should have been set up with our psychologi-*

*cal uncertainties in mind.* (京都大)  
(物理的宇宙の構築は、我々の心理的な不確実性を配慮してなされるべきであったのだ、とでも言わんばかりに、そのような予言を、人間が確実性に信仰を置いていることに対して科学が否定的な影響となっているのではないかと疑いを抱く根拠としてすらみならず人もいる。)

as if に仮定法を後続する場合、仮定法過去(⇒動詞の過去形)、もしくは仮定法過去完了(⇒ had + p. p.)とするのが通例である。(15)では、had been set up with ... とすべきところを文意の強調のために、should have seen に置換している。should have + p. p. ～自体、〈非難・後悔・遺憾〉など、実現しなかった過去の事実を表現する形であるから、読解過程で仮定法を直感したいものである。

(16) Yet despite the appeal of these claims, which seem to strike a popular chord, many of the attacks on the media are drawn in black-and-white terms, *as though there is one television experience, rather than multiple channels and programs, and one audience, rather than different types of viewers.*

(千葉大)

(しかし、人々の琴線に触れるような、こういった主張のアピールがあるにも関わらず、メディアに対する批判の多くは、多様なチャンネルや番組があってもテレビによる経験内容が一律であるとか、さまざまなタイプの視聴者がいても、皆、同質であるかのように、白か黒か割り切った言い方でなされている。)

(16)は as though に直説法が後続しているから〈比喩〉ではあるが、談話情報は事実に基づいたトピックになっている。as if や as though があれば仮定法という〈機械的〉習得ではなく、context と文の「形」に注意した読み方をしたい。

(龍谷大学付属平安中学校・高等学校校長補佐)